

世界で闘うための スーツ戦略

井本拓海

恥ずかしい
スーツ姿、
さらしていませんか？
若者よ、グローバル・ビジネスは見た目が9割だ！
英語ができなくても、数字に弱くても、正しいスーツがキミを救う。

世界で闘うためのスーツ戦略

井本拓海

星海社

151



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに

「ボタンはちゃんと全部留めなさい」

就職活動でスーツに袖を通すときになって、遠い昔に母親が言っていた身だしなみに関わる言葉を思い出した。だが、僕は学生時代に正しく制服を着ることはなかった。

学生としての正しい身だしなみは簡単だ。ボタンをすべて留めて、ズボンはちゃんと上げて穿く。逆に、ボタンを開けている数が多いほど、ズボンを下げれば下げるほど、着崩していることになる。若かった僕は、この単純な身だしなみのルールをバカにしていた。

しかし皮肉なことに、いざ就職活動を始めるときに僕が持っていた服装に関する知識は「ボタンを留めて、ズボンを上げる」、たったこれだけだった。

だから、そんな僕の就職活動のスーツスタイルは、黒のジャケットの3つのボタンをすべて留めて、ズボンが少しでも下に下らないようにベルトは最もきつく締めるというも

のだった。結果として、僕の就活姿は、Vゾーンはとても狭く、ジャケットを脱ぐとズボンの腰の生地は醜くよれて、裾は靴下が見えるほど短い、というものだった。靴下は、時としてカジュアルシーンで用いられるくるぶし丈の白いソックスを兼用していた。白の靴下なんて、なんと優等生らしいのだと思いつつ。

その一方、面接や大学に行つてリクルートスーツを着ている人を見るたびに、「あいつのスーツ、ネイビーだ。スーツは黒だろ、普通」「あいつフロントボタン1個開けているとか、ここで色気出しちゃつて」「ズボンをちゃんと穿いていないから、靴の部分でズボンがクシャツてなっているじゃん」と心の中で毒づいた。周囲と比較しては、自分の「正しい着こなし」に対して悦に入っていたのだった。

我ながら恐ろしいのは、ビジネスマンとしてあるまじき服装を長い期間続けていたこと。そして、それ以上に「自分が正しい」という前提で「周囲を蔑んでいた」ことだ。特に努力もせずに身につけただけの薄っぺらい知識で周囲を蔑むなんて、貧弱な人間性の表れだ。

あれこれ小難しい言葉を避けて、一言で言うならば「ダサイ」。

社会に出てからしばらくの間、僕はスーツ姿も人間性も極めてダサくて恥ずかしい奴だったのだ。

就職活動から数年経ち、僕は仕事で海外に出る機会に恵まれた。今も日常的に日本人が海外の人と切磋琢磨しつつ、途上国に対して技術支援をする現場にいる。

そんな僕が日々感じていることを率直に言いたいと思う。

多くの日本人は「スーツを装うこと」の目的を、ほとんど理解していない。

値札がすべてを物語るかのように錯覚し、宣伝広告費を多く費やすブランドを盲目的に信じている。国が課税したあとの微々たる可処分所得でせつせとヨーロッパやアメリカのブランドモノを買い漁り、トータルバランスなんか考えずにそれらを身につけている。

世界の誰もが認めるように、日本人の国民性のひとつとして協調性が挙げられる。

シワが多く入った黒のスーツに白のボタンダウンのシャツ。みな一様にストライプのタイを締め、ヒビの入ったベルト、そして汚れた革靴。この装いが、“正しい着こなし”と思つて疑わない。さらに持ち前の協調性がこの“正しさ”を助長して、日本人のデフォル

が出来上がってしまったようだ。

こんな姿は、スーツの正しい着こなしを知っている人から見れば、恥の塊以外の何物でもない。

この「恥」をぶら下げた姿で「日本の製品は他国の製品より優れている」とか「日本人は勤勉で優れているから経済発展できたのだ」などと周辺国に語るのは、たとえ真実だとしても、その姿は少し滑稽が過ぎる。そして、何よりも「イタイ」のは、（すでにお気づきのように）この事実に向の本人たちが気づけていないことだ。

ここに書き綴ることは、20代中盤からの僕が10年間で身につけたスーツに関する知識と実践の集大成だ。僕は、次の3つの考えを提唱する。

① ルールに則った着こなし

学校や職場では、スーツにまつわるルールは教えられない。本来は、販売員が数えてくれたり、上司が指導するのが一番手っ取り早いのだろう。ただ、日本では他人の外見について良い点も悪い点も指摘することが多くない。それに、販売員や上司もルールをきちん

と知らないことがある。

どれほど色使いが上手だろうが、ブランドモノを身につけていようが、ルールすら守れないのであれば、ビジネスをやる以前の問題。普通ならば、軽蔑されても仕方ないと言える。まずは、ルールを徹底して守ることが重要。

その第一歩は、ルールを知ることだ。

②どこでも通用するオーソドックスな商品選択

確かにブランドや有名な原産地は一定の品質を保証してくれる。

でも、最優先事項ではない。ブランドやメーカーの名前や産地を覚えることに腐心するよりは、生地や素材、デザインのフォーマル度合いを知るほうが、早く、適切に、必要とするアイテムにたどり着くことができる。

第4章で実際に僕が選んでいるアイテムを紹介するが、雑誌やウェブでの評判は考慮しない。第2章と第3章に記載する基本的な知識をベースとして、自分の足で探した結果、たどり着いたアイテムだ。

第3章までの知識を携えておけば、評判やトレンドという周囲のノイズではなく、自分のニーズと予算に合致するかどうかだけで商品を選択できるようになる。

結果的にオーソドックスな商品を選ぶことが多くなるだろう。詳しくは後で説明するが、ビジネスシーンで装う目的は、「信頼を得る」という点に尽きるからだ。

目的が明確になったら、次は予算が焦点になる。

残念ながら予算には制限がある。最高級のものばかりを手に入れることはできない。だから、あとで自分の選んだアイテムを並べてみると、それらは非常にオーソドックスでありきたりなアイテムばかりに思えるかもしれない。ただ、それは当然と言えば当然だ。

価値のあるものは高い。ただ、世の中には価値はそれほどないのに、値段が高いものも溢れている。評判やトレンドというノイズが「付加価値」と見なされていることがあり、そのために金額が釣り上がるからだ。

生地や素材、デザインのフォーマル度を正しく知れば、本当の価値とノイズを区別できるようになる。そうして選んだアイテムは、ありきたりに見えても、お金がないからというような消極的な選択の結果ではない。「信頼を得る」という目的のみに執着し、無理なく購入できる予算内での最高の選択だ。いわば、評判やトレンドを削ぎ落として洗練した選

沢山のだ。

この選択は、世代や年代、年齢、国境をも超越し、普遍性を纏^{まと}う。

③ミニマル志向Ⅱ買い揃える数とその理由の明確化

一番の無駄遣いは、使わないものを購入すること。

また、仮に使ったとしてもその頻度が低ければ低いほど、費用対効果は良くない。できる限り多く使うものに、できる限り多くのお金を投じることが合理的だと言える。

僕は海外出張が多いため、スーツケース1つ、30kg以内に自分の荷物をまとめるという制限から逃れることはできない。高いお金を出したけれど、日本でしか使わないというアイテムは長い目で見れば無駄になってしまう。また、海外出張に持っていくアイテムだけ安価に済ませるというのも確かにロストバゲージ（鞆がなくなること）のリスクはオフにできる。でも、出張中は大事な稼働時間であり、人前で最も自分の価値をアピールするタイミング。納得のいかないアイテムで固めた姿は、たとえ周囲が気づかなかったとしても、一人のプロとして十分な準備をしたとは言えず、後ろめたさを感じつつ業務をすることに

なる。

このような環境は、僕に持ち物を制限させ、いくつ必要でどの程度の予算ならば許されるのかということを常に考えさせた。自分の持ち物には、制限をクリアするだけの何かしらの理由が必要だったのだ。結果として、各アイテムの最小限の数はじき出すことから始めて、エクセルで持ち物を管理するようになった。

数についてミニマルを志向しつつも、一点一点は持つべき理由があるアイテム。そして、決して安物ではないが、ロストしたとしても新しく買い直せる程度の価格。

僕の年収は日本人の平均と同じなので、僕の買い物物の仕方はあなたにも大いに参考になるはずだ。

この1冊は、あなたのスーツ姿をグローバルスタンダードに引き上げる。これさえ読めば、**センスなし、お金なし、時間なしで、誰でも**世界で十分に闘えるスーツスタイルを創り上げることができるようになる。また、ここに書かれた知識を携えておけば、海外の人たちがスーツに映える精悍な顔立ちや長身というアドバンテージを持っていたとしても、必ずしも正しいルールや着こなし方に習熟しているわけではないことも見抜ける。

実際、僕は海外出張のたびに現地で「どういうスーツを買えば、お前みたいになれるのだ？」と聞かれる。空港でいきなり「いい組み合わせだ」と歳が倍は違うだろうと思われる紳士から声をかけられたこともある。顔面のかっこよさでは遠く及ばないが、ビジネスパーソンとしての準備で負けていると感じることはない。自信を持って仕事に取り組める。これは、おぼろげな感覚ではなく、確信だ。

なにしろ僕のスーツは300USDルもするMade in Japanで、身長は167cmもあるのだから、当然かもしれないけれど。

この本を読んでくれる人は、昔の僕と同じ過ちをする必要もないし、恥をかく必要もない。

さっさと世界へ羽ばたき、仕事のパフォーマンスに直接的に役立つ知識をインプットし、成果を出していつてほしい。日本を支えろなんて、愛国心にまみれたことを言おうとは思わない。ただ、一人の人間として、プロフェッショナルでいてほしいと思う。プロフェッ

シヨナルであるということは、自分自身の今に意味をもたらすだけではなく、自分の守りたいものを守る基礎となるはずだから。プロフェッショナルがたかがスーツひとつで過小評価され、恥さらしになってしまうのは、あまりにもつたない。

僕たち日本人が世界に誇れることは数えきれない。

それを正しく伝えるためにも、まず、最初の印象を決めてしまうスーツ姿を整えることに、一人ひとりが真剣に向き合ってもらいたいと切に願う。

目次

はじめに 3

第1章

マインドセット 19

1 スーツは最もコスパの良い自己投資 20

2 ビジネスVSカジュアル 27

3 リターン..装う目的 34

4 オシャレではなくスタイル 42

5 予算と数 — ミニマル 48

第2章

基礎編

スーツのルール

57

1 優先順位 58

2 ルールとは文法 65

3 正しいシャツ 71

4 正しいジャケット 83

5 正しいズボン 96

6 正しいタイ 102

7 正しい靴 110

8 正しい小物 119

第3章

中級編

色と柄、生地、組み合わせ

129

1 スタイル確立への第一歩 中級編 130

第4章

実践編

僕の普段の組み合わせ

167

2 革製品の選択 137

3 配色の技術 147

4 柄のフォーマル度 153

5 手ぶらという選択 158

1 ベーシックなスーツスタイル（日本） 168

2 ベーシックなスーツスタイル（海外） 176

3 夏のジャケパン 184

4 冬のスーツ 190

5 冬のジャケパン 1 197

6 冬のジャケパン 2 204

7 カジュアルダウン 212

第
5
章

NG集

223

NG 1 白の下着を着ること 225

NG 2 ポケットにモノを入れること 227

NG 3 シャツ姿をデファクトスタンダードにすること 229

NG 4 結婚指輪と腕時計以外のアクセサリを用いること 230

NG 5 靴を磨かないこと 232

NG 6 景品のペンを用いること 233

NG 7 ズボンよりも薄い色の靴下を穿くこと 235

NG 8 メガネが汚れていること 237

NG 9 耳毛を伸ばすこと 239

NG 10 スマホの画面が割れていること 241

第 1 章

マインド
セット

1 スーツは最もコスパの良い自己投資

英会話スクール、資格取得のための勉強、トレーニングジムの会費からランニングウェアの購入まで、これらの消費は、自己投資もしくは自己啓発という免罪符で肯定される。確かに、お金と労力をかけ、懸命に努力することで様々な能力は向上する。そして、新しい仕事を得ることができたり、周囲からの評価が上がったりして、その結果、年収が上がるというようなりターンがもたらされることもある。

また、金銭的なリターンが得られずとも、その努力の過程自体に価値があるという考え方もある。

ただ、多くの自己投資や自己啓発は、具体的な結果を得るにせよ、プロセスから学ぶにせよ、ある大きな問題を抱えている。

時間がかかりすぎるのだ。

スピードラーニングよりも早く、できるならばマジックのように一瞬で結果の出る自己投資はないのだろうか。

あまりに虫のいい話だが、1つ存在する。

それは、(靴や小物を含む) スーツへの投資だ。

こう言うと、「スーツを買う予算は限られている」とか、「毎年流行が変わるし、いちいちキヤッチアップするのは面倒だ」とか、「すでにブランドものを身につけているから、十分投資している」という反論が聞こえてくるのは目に見えている。

残念ながら、大抵のビジネスマンには、雑誌に載っているような着こなしを毎日真似することはできない。それは、年をとれば自然と少しずつ崩れていく体形のせいでもあるが、やはり何よりも経済的な問題が立ちはだかるからだ。どれだけスタイルが良かろうと、審美眼に優れていようと、色彩のセンスがあろうと、そもそも先立つものがなければ太刀打

ちできない。

もし、「世の中の“一流”のビジネスパーソンは、すべからく頭のとっぺんから、足の先まで高級品を身につけておかねばならない」というのであれば、平均年収以下の僕たちは、一生一流にはなれないということになる。

馬鹿げた話だ。

また、高校生や大学生のときに身につけた服装の知識の大半は、カジュアルウェアに関するものだ。当時、毎月買っていたファッション雑誌で覚えた用語やブランドは、ビジネスウェアのそれとはかなり異なる。若い頃に服を買う動機は、異性にモテたいとか、友達とは違う格好をして自分を表現したいというものが多いと思う。しかし、このような考えも、ビジネスウェアを選ぶときには邪魔になる。ビジネスの場で求められるのは、自己主張しない、調和を重んじた、安定感のある服装である。

最新のトレンドを反映した個性的なスーツは求められていないし、まして、職場で異性の気を引こうとするのは公私混同が甚だしい。職場は、仕事のパフォーマンスだけを追え

ばいいのであって、決して、服装で個性や下心を表現する場所ではない。

このようなことを理解した上で、いざスーツの特集をしている雑誌を買ってみると、見慣れない横文字や最近生まれたであろう言葉が並んでいる。しかも、さも「これを知らない」と時代遅れだと思われるよ」と言いたげな記事の内容や、「これを買っておけば間違いない」という編集者のオススメのアイテムは、毎号変わるらしい。(大人の事情だろうけれど。)まさに、消費(投資)することは、好ましいことだと言わんばかりに。

しかし、移ろい変わるものはあくまでトレンドでしかなく、来年以降は役に立たないのならば、それを身につけるためにお金をかけることを投資と言うことはできない。

そういったトレンドをキャッチアップし、スーツをオーダーし、数百万円もする腕時計をして「俺の着こなしはバッチリだ」なんて思っているかもしれない。

では、そういうあなたを窮地に追いやる質問を。

「選んだすべてのものについて、理由を述べることができるか？」

「今流行っているんで」という回答が許されるのは、20歳に満たない子供だけだ。

頭のとっぺんから、足の先まで、あらゆる所有物に理由がないというのは、自分がない

というのと同義だ。30年、60年生きている人間が、何も理由なく、ただなんとなく身につけている、ということほど残念なことはない。そんな状態で「自分は服装に投資しているんですよ!」と主張するつもりなら、あまりに浅はかだと言わざるを得ない。あっさり「僕はスーツにはお金をかけない主義だ。だから、すべてユニクロで調達している」と言うほうが、その人の生活スタイルが垣間見られるし、一本筋が通っていると思う。トレンドに踊らされて、ブランドモノを身につけるよりはずっと良い。

僕が考える「スーツへの投資」とは、ブランドモノに闇雲にお金を投じることでもなければ、トレンドを逐一インプットすることでもない。まして、なんの考えも戦略もなく、ただアイテムを増やすことでもない。

「スーツへの投資」とは、「スーツに対する正しい知識を持つ」ということだ。

ビジネスの成功にはLUCK(運)が必要と言われる。だが、LUCKはその頭文字が示すように、Learning Under Correct Knowledge (正しい知識を通じた学び)を経て、初めて掴めるものとも言われている。

この本の内容は、僕が厳選したスーツとその着こなしのCorrect Knowledge (正しい知識)

だ。ビジネスウェアに必要なかつ十分な知識をこの本一冊に詰め込んである。

本書は既製品を選ぶ前提で話を進めていく。

しかし、昨今、各社がこぞってパターンオーダーのスーツを手頃な価格で提供し始めた。いい傾向だと思う。オーダーにトライするときも、本書の知識は必ず役立つので安心して読み進めてほしい。

この本を読み進めていけば、数時間後には、一生使えるビジネススーツに関する知識を網羅できる。この知識は、あなたの明日からの立ち居振る舞い、買い物、あらゆるシーンに貢献する。もう無駄なものは買わなくて済むし、すぐに捨てるものや使わないものを保管している無駄なスペースも消え去る。そして、何よりもあなたのスーツ姿が「正しい知識に基づいた」理由のある着こなしに生まれ変わる。

「選んだすべてのものについて、理由を述べることができるか？」

あなたは、さきほどの質問にも答えられるようになっていたろう。ただし、その答えはグダグダと言葉を連ねて語るものではないことも同時に理解しているはずだ。どんなも

のでもそれについての知識を得ると、自称ワイン好きがワインを語るようにくどくどと理由を言いたくなるものだ。しかし、本物の紳士はそんな無粋な真似はしない。真の紳士は、「ワインは美味くて話が弾めばいいじゃん」と言える。それと同様に、自分がなぜこのスーツを選んだのかという理由は、最終的にはそれを見た相手が推し量ってくれればいい。そう思う余裕のある状態こそ紳士的だ。

確信的なあなたの着こなしの理由は、教養のある相手には必ず伝わると断言できる。嬉々として「あの雑誌に出ていたんですよ！」なんてペラペラと薄い回答が口について出てくることは決してない。最も紳士な対応は、何も語らないことだ。第4章では、僕はくどくど選択理由を述べているが、これを人前ですれば無粋だ。

その余裕を見た相手は、あなたが期待した以上に、あなたを評価する。そう、あの人はスタイルがあるのだ、と。

2 ビジネスVSカジュアル

外見の印象がどれほど仕事に影響を与えるのかという問題について、正直なところ、誰も明確な回答を知らないし、おそらく今後も数値化されて分析されるようなことはないと思う。

靴を3万円のものから10万円のものに新調したから、5割増しかつこよくなったというように数字で示せることではない。また、外見の印象という千差万別の感覚を、公式のように導き出すことは不可能だ。

ただ、ひとつ確実な事実として言えるのは、「外見を変えることが最も即効性のある自己投資である」ということ。買って身につけるだけで「変身」できるのだから。そして、外に出れば間違いなく周囲からの評価は変わる。確実に。

服装にお金や時間を投じると決めたとして、次はビジネスとカジュアルの比率が問題に

なる。

これは、明確に数字で説明できる。それは、週に何日人前に出てパフォーマンスするかという比率だ。

一般的なサラリーマンを想定すれば、週に5日間労働し残りの2日間は休日となるので、ビジネス…カジュアルⅡ5…2の割合でお金を投じればいいとなる。さらに、この2日間の休日には、美容院や歯科というようなメンテナンスの日（パフォーマンスしない日）も含まれるので、5…1と考えてもいいかもしれない。

20代のときによく聞いた女性からの意見に、「（男性は）スーツだとかっこよく見えるのに、休日に私服でデートしたら、全然ファッションセンスがなくて、少し残念だった」というものがある。ただ、僕たちは20代の若い女性の注意を引くことが人生の目的ではないし（もしかしたらそういう人もいるかもしれないが……）、休日にお金を稼ぐわけでもない。そうだとすれば、極端ではあるがビジネスパーソンは5…0でビジネスシーンに用いるものに投資するべきだ、と言うこともできる。

休日はダサくていいのだ、ということではなく、投じる資源（お金や時間）が限られているのであれば、ビジネスのほうにより多くを投じるほうが望ましいと言いたただけだ。

世の中では、「用語」ひとつとってみても、あまりにもカジュアルシーンでのファッションが重視されすぎていると感じる。雑誌やテレビでもよく目にする「アメカジ」や、「Aライン」、「スキニー」のような単語を覚えることは、確かにカジュアルシーンの理解に役に立つものの、ビジネスシーンの装いで明確にプラスになることはない。それよりも、「内羽根」や、「スリーピース」、「ダブル」という言葉が指し示す内容、使用するシーンとフォーマル度を知ることのほうが、ビジネスシーンの着こなしに直接貢献する。

いずれにせよ、ビジネスパーソンにとっては、「おしゃれや服に投資する＝高いジーンズを買う、ヴィンテージのスニーカーを探し求める、ハイブランドの小物を漁る」ではない。同様に、トレンドを知ることや、トレンドを闇雲に取り入れることも、リターンを見据えた合理的な取り組みとは言えない。

単純な話で、いくら高価なスポーツウォッチを手に入れたところで、ルール上、それはビジネスには使えない。もしあなたがそれを「高価だから」「流行だから」「ブランド品だから」というような理由だけで、ビジネスシーンで用いていたならば、その行為は無神経だし、大抵の場合、非常識な人というマイナスの評価を得ることになる。反対に、さほど

高価ではないジャケットの袖を正しい丈になるように数cm調整して着ていたとすれば、必ずプラスの評価を得られる。

この例からもわかるように、**服装への投資額は少なくてもいい。**

いや、むしろ、予算に限りがあったほうが、どこにどれだけ投じれば最大のリターンを得られるかを考える良い練習にもなる。いかなる投資も、まずは「絞る」ことが必要だ。元本が少ない状態でのリスク分散は不要だ。あれもこれもと選択肢が多いと、かける労力も分散してしまう。

安直に雑誌をパラパラめくり、トレンドを意識したデザインや、広告宣伝費をふんだんにかけることで売上高を維持している企業の製品を買うことは、適切な投資とは言えない。なぜならば、無限の財産を持つわけではない僕たちの至上命題は、できるだけ安価で品質の良いアイテムを選び、手元に揃えることだからだ。別に「流行に敏感な人」や「服装にお金をかける人」という評価を買いたいわけではないからだ。そういった評価が悪いわけではないが、ビジネスパーソンとしての信頼には直接的に繋がらないだろう。

僕は、ビジネスパーソンは、礼儀正しくて、誠実で、「信頼に足る人」という評価を得ることを最優先にして服装を決めるべきだと考えている。

また、知識という点においても、ビジネスシーンを始めとしたフォーマルを先に学ぶことは、カジュアルにも大いに役立つ。なぜか。それは、ビジネスシーンやフォーマルにおける装いにはある程度ルールがあるからだ。したがって、ルールに則った着こなしをすることが求められる。反対にカジュアルには体系的なルールがない。基本的には何を着ても自由だ（これがカジュアルの良さであり、楽しさでもある）。カジュアルだけに詳しいということは、ルールを無視したフィールドで、無秩序に知識だけを増やしているに過ぎない。体系立っていない知識だけでは、ビジネスという本番の着こなしで失敗する。

「黒の革靴さえ履いていれば、ビジネスに相応^{ふさわ}しい着こなしだ」と言うのは、カジュアルを先に学び、ビジネスルールの優先順位を下げているような助言の一例である。さすがに、スーツにスニーカーを合わせることはよほどのことがない限り、ありえないだろう。しかし、黒の革靴を履いている人たちも、ルールを踏まえた上で選択している人、ルールはわからないけれどもたまたま運良くあたっている人、ルールを無視している人、の3種類に分

類することができる。

ルールをきちんとわかっていれば、ルールを踏まえた上で正しい靴選びができる。さらに言えば、ルールがわかっているのも、そこから外れているものはカジュアルだという判別もつく。したがって、カジュアルについては特別に学ばなくとも、カジュアルシーンに相応しい選択が自然とできるようになる。

一言で言えば、ビジネスシーンにおける服装のルールを学ぶことは、一挙両得、一度で二度美味しいのだ。そして、ルールはそれほど多いわけではない。この一冊で網羅できる分量なのだから。

特にカジュアルシーンでは、よく「センス」の良し悪しを取り沙汰される。論理的には説明できないけどなんとなくいい感じがするものを「センスが良い」なんて言ったりもする。この曖昧さが、オシャレを嫌いになる一因になっていると思う。

スーツ姿にももちろんセンスの良し悪しはある。しかし、センスは最優先されるものでは断じてない。

スーツを着る上で最も大事なものはルールである。

ルールは、論理的に説明できる。センスよりも断然学んで身につけやすい。だから、本業で忙しいあなたが、カジュアルから先に学ぶ必要などないし、限りある資源であるお金を戦略もなくそこに投じる必要もないのだ。

ビジネスにおける服装のルールを学べば、すべてが解決する。ルールを徹底した後、お金や時間に余裕があるならば、そのときが初めてカジュアルを学び、センスを磨くときだ。そして、大いにその自由を享受してほしい。

**センスの上に、ルールが存在するのではない。
ルールの上に、センスが存在するのだ。**

B リターン…装う目的

これまでに、「リターン」という言葉を何回か使った。

スーツなんか学んで、そしてお金を投じて、何を得られるのか。

一言で言えば、対面する相手に安心感を与え、「信頼を得ることが出来る」。それも一瞬で。なんの労力も、マジックも使うことなく。

このリターンを得ることに、相手の国籍や年齢は関係ない。

正しい装いをすれば、誰でもどこでもこのリターンを得ることができる。

たとえばジャパニーズ・イングリッシュしか話せなくても、英語がわかる者同士ならコミュニケーションができるように、スーツのルールは万国共通だ。アメリカだからこうしなければならぬとか、日本の地方に行くときには違う装い方がある、という類のものでは

ない。むしろ、英語以上に通用する範囲が広いという意味で、スーツは英語以上の共通言語とも言える。もちろん、スーツの着こなしを正當に評価してもらうには、相手も十分な知識を持つていることが前提になる。そういった人の数は、決して多くはないかもしれない。ただ、少なくとも知識に裏付けされた正しい装いは、自分自身に自信をもたらす。そして「相手に敬意を表した、正しい着こなしをして、自分は今ここにいる」という自信は、自然と態度に表れる。これは、確実に相手に伝わるし、接する相手はあなたから安定感を感知取ることになる。そうして、安心感が芽生える。

「同僚や上司に仕事ができると認められたい」とか、「クライアントからより多くの仕事を引き受けたい」というような下心。あるいは、「はたして自分のスーツの着方は本當に合っているのだろうか」とか、「最近部下を持つようになったけれど、上司として見本になるような着こなしができていだろうか」とか、「これから海外での仕事が増えるが、日本代表として、会社の代表として、まっとうなスーツを着られているだろうか」というような、今更誰かに訊けないような悩みや恥をかくことへの恐れ。いずれの場合でも、今よりステップアップしたいという「変化への欲」が根底にある。これがスーツを学ぶ最初の入り口

でも問題ない。むしろ自然な導入だとさえ感じる。

人間はみな「欲」に突き動かされる。変化への欲は、外見を整えることで、最も早く簡単に満たすことができる。

ただ、そういった目の前の「欲」を満たすものとしてスーツに関心を持ったとしても、中長期的な視点も併せて持っていたほうがいい。なぜなら、本来、僕たちが必要としているニーズを捉え違えていては、早晚、野暮な着こなしになってしまうからだ。

例えば、歓心を買いたいという下心が先行すると、奇抜さやトレンドに走りがちになり、結果として、安定感からは遠のいてしまう。ひどいときには、「流行に流されやすい人」とか、「軽薄な人」というマイナスの印象を持たれてしまうかもしれない。また、恥をかくことへの恐れが先行すると、周囲の誤った着こなしや情報に流される危険性がある。黒のストーツに白のシャツを着ていればなんとなくその他大勢に紛れることができるので、それが正しいと勘違いしてしまう。結果、確かにあなたの所属する会社や部署の中では「普通の人」とみなされていても、（特に海外の）営業先やクライアントといった外部の目に晒された瞬間にあなたは「非常識な人」になる。

こういった事態は、いずれも世界のビジネスシーンの共通言語であるスーツの基本的な

知識を持っていないから引き起こされる事故だ。事故は未然に防ぐことができる。

僕は出張で海外に行くと、「お前はどこのブランドのスーツを着ているのだ」とか「良いスーツを着ているな」と声をかけられることが多い。笑って「そんなことないよ」と言いつつ金額をこっそり教えてあげると、みな一様に驚く。僕は出張では既成品でツープライズ（2つ、もしくは3つの価格帯を設定・販売しているお店のもの）のスーツしか着用しない。

また、僕は童顔なので日本にいと比較的若く見られることが多い。しかし、海外に出ると、大抵の場合プラス5歳ほどに見られるし、同年代の日本人の同僚と一緒に仕事をしていたても、海外のメンバーからは「お前のほうが役職は上だろう」とか「頼りがいがある」と頻繁に言われる。お世辞も入っていると思うし、仕事のやり方や場馴れ、発話のタイミング、そして何よりも僕の横柄な態度も影響していると思う。ただ、僕と他の日本人の決定的な違いは、スーツの着こなしであることは見過ごせない事実のひとつだと考えている。

日本では他人の身なりや外見について指摘し、褒めることはあまりない。男性が女性の

それを指摘するとセクハラだと言われる恐れも高まっているし、反対もまたそうだろう。一方、海外ではHow are you?に続いて、「良いジャケットだね」とか「決まっているね」というように相手の外見について感想を言う頻度が格段に高い。そういうときに僕は褒められることが多い。特にスリーピースを着ているときは、「本当にお前はかっこいい」と身長167cmの胸板の薄い日本人に向かって、こちらが気恥ずかしくなるような褒め言葉をかけてもらうこともある。時として、「お前だったらどのようなネクタイをチョイスするか」とか「この靴は適切なのか」というような相談も受ける。彼らは僕が今こうしてスーツの本を書いていることを知らないし、普段僕から彼らにスーツの専門的な話を投げかけるわけでもない。ただ、日頃の僕の安定した着こなしを見て、評価して、信頼してくれているからこそ、彼らは自分の戦闘服であるスーツについて、他でもない僕に相談をしてくれるのだろう。戦場における装備について相談を受けるということは、その相手と最高の信頼関係を築けていると言っても過言ではないだろう。もちろん、相談に対する返答はできる限り真摯に、そして彼らの予算や経済状況も考えて（僕は現在アフリカ担当なので、仕事相手と僕との可処分所得は開きが大きい）、サイズや素材についての知識を織り交ぜ、自国でも手に入れることができるようにアドバイスをしている。このやり取りに日本という狭

い地域のトレンドの話が出てくるはずもないし、世界的に有名で高級な生地、メーカー、ブランドの名前が出てくることもない。

スーツを装う目的が国や年代が違っても一緒だと考える理由は、このような経験に基づいている。みな、スーツを装う目的は根本のところでは同じなのである。

対面する相手に安心感を与え、「信頼を得るため」。

僕がこの目的にしがみついて、固執する姿勢を周囲の人は評価してくれる。

これを突き詰めていった結果、副産物として、男性的な印象を与えて異性からモテることもあるだろうし、クライアントから好感を得て仕事をもらえる機会が増えることも、上司からマネジメント能力が高いとみなされて、仕事を任されることもあるだろう。少なくとも、正しさから離れないことは、恥をかくリスクをゼロにできる。

スーツに対してこういう姿勢を貫くことで他にも多くものを得ることができる。努力して身につけた知識と、失敗や反復から得たセンスは誰にも奪うことはできない。あなたが

スーツを着る限り、スーツはあなたに貢献してくれる。決してあなたがスーツ（企業）に貢献するのではない。学ぶのは、早ければ早いほうが良い。得るものも大きくなるし、無駄も少なくなる。得られるリターンはお金ではないかもしれないが、根本の原理は投資と何ひとつ変わらない。

学ぶほどに成長し、リターンを得ることができる。このプラスのサイクルが一度回り始めると、次第に楽しさを増す。できないことができるようになる。この小さな楽しさは、次第に拡がりを帯びていく。

素材をどうするか。色をどうするか。こういう細部の積み重ねを繰り返し、どのような自分を創り出すのか。究極的には、接する相手のために、言葉にはできない敬意や感謝、そして愛をどうやって示すか。いわば、自分のために装うことから、相手のために装おうと考えるようになる瞬間が必ず訪れる。真の意味で“装っている”ときであり、楽しい時間だ。

誰かのプレゼントを考えるときのよう。

誰かの笑顔を創り出そうと作戦を練るときのように。

誰かの幸せを演出しようと画策するときのように。

たぶん、僕たちがビジネスにかかわらず広い意味で装う別の理由とリターンは、題名のない時間に彩りを咲かせること、そして、大切な誰かの幸せの一部になれること。

至極シンプルな結論に行き着いたとき、それは、きっと僕たちが根源的に得たいものを得られるときなのだと想う。

4 オシャレではなくスタイル

「オシャレですね」と声をかけられて、気分が悪くなることはないけれど、素直に喜ぶことができない自分がいるのも確か。僕はスーツでオシャレをしているとは思っていないし、職場のオシャレ番長になることをゴールにしたりはしていない。多くの人は、外見を形容したり、褒めたりする言葉をそれほど多くは持っていないのかもしれない。だから、きつと「井本さんらしいですね」という意味も含まれているのだと自分に言い聞かせている。

ドラゴンクエストやファイナルファンタジーに代表されるRPGで遊んだことはあるだろうか。これらのゲームでは、主人公とその一行は敵を倒しながらレベルアップしていく。また、武器や防具を身につけることで各々の能力を高めることができる。最初は安価でたいてい能力を上げることができない武器や防具ばかりだが、ストーリーが進むにつれて、より高価で能力も飛躍的に向上する装備を手に入れられる。

しかし、現実世界にはモンスターがいるわけでもないし、敵と戦闘をするわけでもないから、盾や兜で身を守る必要はない。

でも、役職が上がったり、所得が増えたり、社会的な役割が大きくなったりすると、会社以外でも様々な人と会わなければならなくなる。敵と対峙するとまではいなくても、ある程度の緊張感を持って臨むべき場面やそのバリエーションが多くなるということだ。つまり僕たちは、年齢に応じてその時々自分に相応しいスーツを選び直さなければならぬ。新卒のときにどれだけベーシックでルールに則ったスーツを買ったとしても、それを何十年も着続けることはできない。ゲームの主人公と同じだ。最初の街で手に入れた装備を、ラスボス戦でも使うなんてことはない。いや、使うのは自由だが、ゲームクリアまでたどり着けるかは甚だ疑問だ。

ゲームならば、攻撃力や守備力といったステータスを数値化してくれる。だから、何が良くて、何が悪いのか、どの装備を身につければいいのかは明白だ。

だが、現実ではまずそんなことはない。ゲームの主人公のように整った容姿をしていて、常にジャストサイズの洋服が手頃な値段で手に入る状況にあるのであれば話は別だが、現実で与えられる条件は、いつだってゲームより厳しい。

しかし、悲觀的になりすぎる必要はない。スーツの場合は、着こなしのルールを正確に理解すれば、及第点を取ることは誰にでも容易だからだ。そういう意味で、**ルールを守るだけの着こなしは、ルールを破っている着こなしよりも比較にならないほど優れている。**ルールを守ってさえいれば、僕のように顔面が故障していたとしても、安定や信頼を身に纏うことができる。

しかし、少し色気づいて「オシャレ」を目指すと、落とし穴にハマってしまう。トレンドという名の落とし穴だ。トレンドは必ず廃れる。廃れた装いすたをしている人間が信頼されるわけではない。

ただ、ルールを守る着こなしだけでは、その人らしさを表現することは難しい。大抵の場合、僕たちは社会に関わる20歳前後以降、40年以上もの間スーツを装う機会がある。その間ずっとルールを守り続けるだけでは、装う楽しさを見失ってしまうだろう。ルールをきちんと学んだ後に、TPOをわきまえ、逸脱しすぎない変化やその人らしさを求め、新しいアイテムを取り入れることは、当然な流れだし、悪いことでもない。

「スタイル」、それは反復と頑ななこだわりから生み出されるものだ。だから、時に根無

し草の周囲の人たちには理解しがたいこともあるだろうし、悪い言い方をするとマニアックとも表現できる。しかしながら、それは時を経ても風化しない。ひとつの「様式（スタイル）」として時を経ても残る。

主人公にだけ持つことが許された武器や装備があるように、あなただけに許される「スタイル」を目指すべきだ。頑なにルールを守る自分がわずかに許したオリジナリティ、それが見事に馴染んだとき、服がその人をより輝かせ、周囲の人間はその姿を評価するだろう。

既製服であつても、服である以上、人が服に合わせるのではない。服が人に合うことを目指すべきだ。そして、時を味方に変えるようにしないと、僕たちは一生ラットレースから抜け出せない。働き、稼ぎ、多くはない給与所得からトレンドのアイテムを買い揃え、身につけ、そして、破棄する。死ぬまで続くこのラットレースから抜け出す唯一の方法は、「時」を味方にするということであり、言い換えると、時間に左右されない自分だけのスタイルを創り出していくことに他ならない。

まだ30代の若造がスーツを語るなんて、とお叱りを受けるかもしれない。服装やスーツスタイルの指南書は星の数ほどある。そのどれもが、有名なスタイリストやファッション雑誌の元編集長、あるいは成功した経営者などが書いたものだ。そういう本の装幀は、大抵彼ら自身やモデルのカッコイイ写真で彩られている。何の実績もない僕に、勝ち目はあ
るだろうか？　かなり分が悪いように思う。でも、僕は怯^{ひる}んだりしない。僕のモチベー
ションは、全く別の次元にあるからだ。

この本を読んだ人、特にこれから世界で活躍すべき若い人たちがトレンドのラットレー
スから抜け出せるならば、僕に対する悪評や揶揄^{やゆ}なんて、大した犠牲^ひじゃない。

この本では、ルール以外も記載する。それは、この「スタイル」に関わることだと考え
てもらっている。オシヤレに見えるためのアドバイスは、雑誌に任せる。僕は、ルールを
破っておらず、「粹」だからそのアイテムをすすめる。それは、時に負けて廃れることはな
い。だから長く使える。それらの知識は、あなたを経済的に豊かにするだろうし、周囲の
あなたに対する評価も高めてくれるに違いない。

いつだって、レバレッジを効かせることを考えないと。時を味方につける術、あなたの

オリジナリティを引き出すヒントも示していきたい。

5 予算と数 — ミニマル

ミニマルについて考えるようになったのは、「スーツケース1つで生活できたらいいのに」と感じたことがきっかけだった。

20代後半から30代前半にかけて1年の半分くらいが海外出張だった。当時は、大阪と東京のどちらにも家（と言っても賃貸だし当時の会社の計らいでこの生活ができていた）があつて、国内でも大きなスーツケースを常時転がしていた。

そんな生活をしていると、出張先で「このスーツにはあのシャツを合わせたかったのに」とか、大阪にいるときに「あのスーツ、東京に置いてきたままだ」というようなストレスを感じることに頻繁にあつた。最終的に、東京に住むことになって家は1つになった。しかし、今度はクローゼットが一杯で、すべての服が入らないという状態になってしまった。そんなときに、経済的にも社会的にも成功している同学年のひとりが「ホテルに住み始

めたよ」という近況報告をくれた。彼はフィリピンやシンガポール、東京でビジネスを動かしていた。そんな彼のライフスタイルにはホテルに住むという選択肢が最も合理的だったようだ。彼は、「ようやく所有から開放された気がする」とつぶやいた。

当時の僕は、家具を買い揃える時間、掃除や洗濯をする時間、インテリアについて悩む時間、こういった時間の蓄積で、同学年の彼と僕との未来に、大きな「差」が生まれるのではないか、ということを感じ取った。同じように海外を転々としながら仕事をしているのに、僕はアイテムに縛られ、家のクローゼットを一杯にして生きている。管理なんてできちゃいない。その一方で、彼は必要最低限のアイテムをスーツケース1つにまとめて世界を股にかけて仕事をしている。その上、管理する手間も最小にして、残りの時間をすべて仕事に賭けている。現状でさえ、大きな差を感じていたのに、その差は今後開く一方であるのだと確信できた。そして、自分も何か変えなければならぬという危機感が生まれたのだった。

ホテルに住めるかどうかは、環境や所得にも関係するけれど、持ち物をミニマルにすることは僕にでもできるはずだと考えた。最初にしたことは、リストを作ることだった。もう少し具体的に言えば、「自分に必要な各アイテムの数を決めること」。その後僕が実際に

生活しながら数年をかけて加減して導き出したミニマルの数字とそれぞれの単価、なぜそうなのかという理由を記載する。この数字は、フルタイムで働く一般的なビジネスパーソンにとって良い目安になると思うし、これから僕がスーツの着こなしについて説明していく中で、重要な判断基準のひとつにもなっている。

シャツ…5枚 各5、900円以上

労働する日数を週に5日だとすれば、この枚数が必要になる。もっとも、平日に洗濯をし、すぐにアイロンをかけてというようなサイクルを回すことができれば、もっと枚数を少なくできるだろう。でも、残業だってあるかもしれないし、大切な人との会食もあるかもしれない。ミニマルといっても、仕事や勉強という未来を生み出す別の投資を切り詰めてまで「ギリギリ」を狙うものではない。無理なく続けられることでなければ破綻してしまう。その意味で、5枚がいいと思う。

なぜ単価は5、900円以上なのか、もっと安いシャツがたくさんあるのに、と思ったかもしれない。ミニマル志向に反しているのではないかと。価格については、素材なども

含めたコストパフォーマンスを考慮しているので、このような結論になっている。日本は恵まれていて、5、900円出せば、コットン100%の良質なシャツが手に入る。だから、ここで2、000円をケチって、化学繊維の入ったシャツを選ぶ理由はない。詳しくは、この本を読み進めていただければわかる。

スーツ（もしくはジャケパン）.. 3パターン 各3万円以上

これについては、自分の職場環境を考慮してほしい。銀行のようにジャケパンが許されない職場もあるだろう。反対に、スーツ姿が浮いてしまう職場もあるはずだ。どんな場合でも、少なくとも各シーズンに3パターンは準備する。最も安価に抑えたいならば、通年で着ることのできるスーツ3着（各3万円）だけでいい。服装規定が少しゆるいならば、スーツは1着、ジャケツト1枚（2万円以上）にズボン2枚（各1万円）を揃えれば3パターンは作れる。

ここで強調したいのは、3「パターン」を持つということだ。ただ、さすがにジャケツト1着、ズボン3枚で3パターンだとすぐにジャケツトは傷むし、何よりも周囲は「毎日

同じジャケットを着ている」と気づくだろうから、清潔感はなくなってしまう。これは避けたい。どれだけ上等なジャケットだとしても清潔感がないならば、「信頼」を培うことはできない。

ネクタイ…4本 各5、000円

ネクタイをより多く持って、着こなしが多いように見せるというのは、素人の安易な考えだ。

反対に、ネクタイだけは高いものを選ぶというのも、なんだか一点豪華主義的で、見る人（価値がわかる人）が見たら、ネクタイだけ上等で浮いてしまっている。これはこれでダメ。

スーツや靴とネクタイのグレードを合わせるべきで、ひとつの参考としてはシャツと同程度の価格のものを選んでおけば、悪目立ちはしない。

ミニマルとしては3本のタイでもいいのだけれど、スーツが3パターンの場合、3本のネクタイだと、常に同じ組み合わせになってしまうので、それを避けるためにネクタイは

4本としている。もつとも、僕自身はタイとスーツがいつも同じ組み合わせでもいいと考えている。ただ、決してべらぼうに高いものでもないので、4本でも可としておきたい。

靴…3足 各3万円以上

詳しくは第2章の7で述べるが、耐久性を加味してグッドイヤーウェルト式製法（以下、グッドイヤー）のものを求めると、3万円以下で革靴を探すことは困難だ。下を見れば1足数千円で合皮の靴を買うことはできるだろう。ただ、靴は全体のコーディネートを底上げしてくれるアイテム。価格と品質がほぼ比例するので、妥協するべきではない。

ミニマルとは、「できる限りケチって、安価なものを手元に揃えること」ではない。そうしてしまうと、僕たちが得たい「安全、安心、信頼」は得ることができない。「リターンを得ることができる最低投資額」を僕は示している。

また、靴は1回履いたら1日休ませて汗を飛ばし、さらに1日形を整える時間が必要とする。よって、1日使ったら2日は間を必要とするため、3足をミニマルの数としている。

靴下…5足 各1、500円

第2章の8で述べるように、スーツに合わせる靴下はいわゆるソックス（くるぶしの上までの丈やふくらはぎの丈）ではなく、ホーズ（膝下までの丈）を選んでほしい。ユニクロもまだ3足1、000円のホーズは出してくれていない。だから、少し割高だけれど、1、500円はホーズ1足に必要なコストだ。また、シャツと同じように洗濯などの手入れのリードタイムも加味すれば5足は必要だろう。

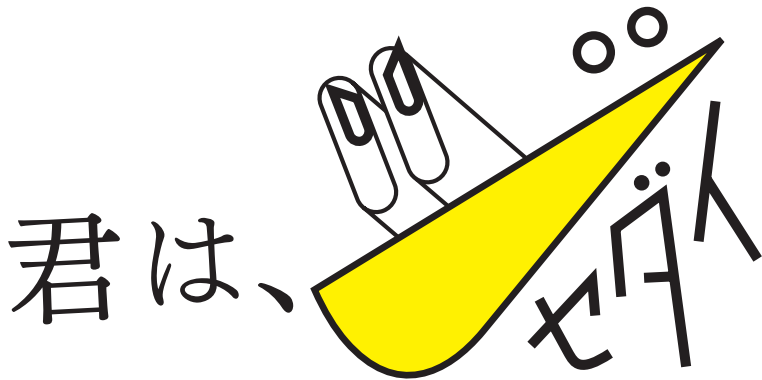
以上が、最低限必要なアイテム数となる。これらをすべて1つのスーツケースに入れることはできない（どんなにがんばっても靴3足は厳しい）けれど、スーツケース2つ分くらいまでに持ち物をスリム化できた。

ちなみに、ここで示した数は、僕が1週間以上海外出張をするときに携行する数とほぼ同じだ。ネクタイは3本、靴は2足にしてその内1足は履いて行く。すると、スーツケース1つにまとまるし、30kg（安価なエコノミークラスのチケットでも許されるスーツケースの

重量)を上回ることはない。

ようやく、「スーツケース1つで『海外出張』」はできるようになったのである。持ち物が減り、当然管理やメンテナンスの手間とコストも少なくなった。

僕は、少しだけホテル住まいの憧れの彼に近づけたように感じた。



何と闘うか？

<http://ji-sedai.jp/>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!